

9. 日清戦争に際し戦史用に作製された2万分の1地形図

小林 茂（大阪大学名誉教授）

日本陸軍はさまざまな縮尺の外邦図を作製した。そのうち多数の図が刊行された縮尺をみると、広範囲の地域をカバーする東亞輿地圖100万分の1)から、小地域をカバーする大縮尺図としては、中国大陸の各所について作製された2万分の1図までがあげられる。もちろんこれよりも大縮尺の図もあるが、その例は特殊な場合に限られ、比較的多く作製された外邦図のなかで2万分の1の縮尺が最も縮尺が大きいと考えてよい。

本誌ではこうした2万分の1図の例としてすでに二つの記事を掲載している。一方の小林ほか(2012)では、日露戦争に際して戦史用に作製された4つの地域の2万分の1図を紹介した。「九連城近傍圖」・「得利寺近傍圖」・「大石橋蓋平近傍圖」・「遼陽近傍圖」である。いずれも戦場になった今日の遼寧省の地域で、一部朝鮮側の地域をふくむ。この中には刊期を1895年と日清戦争期としているものが少数あるが、後述するように、それらは日露戦争後の刊行と判断される。

もう一方の小林・小林(2013)では、北清事変(義和団事件)に際して山海関附近について作製された2万分の1図を紹介した。日本軍は北清事変に参戦した他の諸国軍とともに、戦略的要地である山海関に進駐し、その間を利用して測量・作製したもので、その推進には参謀本部員であった明石元二郎(1864-1919年、当時中佐)の視察報告が重要な役割を果たした。

この時期の2万分の1図を考えるに際し、筆者らは1940年3月発行の「外邦局地圖一覽圖(其一)」(高木菊三郎旧蔵、現大阪大学蔵、小林・長谷川・波江2010: 58-59参照)の記載を用いてきた。そこでは、日本軍の作製した縮尺2万分の1の外邦図の一覽圖が図群ごとに示されており、便利だからである。ただし第2次世界大戦参戦直前というこの図の刊行時期を考えると、当時利用可

能であった図幅のみが示されていると考えられる。

他方、昨年(2020年)になって、日清戦争期作製であることが確認できる5つの図群の2万分の1図を古書として購入することができた。「九連城近傍圖」(5図幅)・「鳳凰城近傍圖」(4図幅)・「大平山近傍圖」(8図幅)・「蓋平近傍圖」(4図幅)・「海城近傍圖」(15図幅)で、刊期は1895年である。これと同じ地域は、日露戦争時にも戦場となり、上記「外邦局地圖一覽圖(其一)」にみえるように、やはり2万分の1図が作られている。両者を比較すると、日露戦争期のものは、日清戦争期に作られたものにくらべて図示範囲を拡大するだけでなく、図群名や図幅名、さらに図番号を変更している場合があることが判明した。これからすると、日清戦争期に作製された図群についてまず基本的な記載を行い、それをもとに日露戦争期作製の図との関係を把握する必要があると考えるに至った。本稿ではこれに向けてまず日清戦争期に作製された図の書誌的事項を示したい。

なお、以上にくわえて、やはり日清戦争期の2万分の1図が、アジア歴史資料センターが公開している小山史料に含まれていることが判明した。「海城近傍圖」(Ref. C13010177200以下)と「旅順口近傍圖」(Ref. C13010146000以下)である。このうち「海城近傍圖」については、画像から大阪大学の購入図と同一版と確認できるが、「旅順口近傍圖」は今のところ小山史料にみられるだけのようである。これもあきらかに戦史用に作成されたと考えられ、あわせて検討したい。なお本来であれば、これらの図は防衛省防衛研究所で原本を確認すべきであるが、新型コロナウイルス流行のため、公開画像によって記載することとしたい。

1. 日清戦争期の2万分1地形図の作製

ここで2万分の1地形図を取りあげるのは、それが大縮尺で当該時期の現地の景観をよく反映していると考えられるからである。このことは日露戦争当時から認識されており、参謀本部の『明治三十七八年日露戦史』の編集に従事した瀧原三郎は、日露戦争時に日本軍に配布された20万分の1図や5万分の1図の精度に問題があったことを指摘しつつ、「但し日清戦争の古戦場附近は稍々正確に測圖せられ他の地域に比し精度遙かに良好であった。其の地方を擧ぐれば九連城、鳳凰城、海城、旅順、金州城、蓋平城・牛莊等の附近にすぎず・・・」と述べている(瀧原 1928: 93)。上記の縮尺2万分の1の図群名と一致するものが多いことが注目される。またこのうち牛莊は「海城近傍圖」のなかに含まれている。唯一「金州城」だけがちがう縮尺によるものと考えられるが、このように評価されるのは、これらの2万分の1図が平板測量による図根(基準点)測量を基礎に測図されたからであろう。

この図群の各図幅の右下の部分に「圖式ハ明治二十七年定ムル所ノ迅速測圖原圖式ニ據ル」と注記されている。これをさかのぼる1885年の「戦時測量班服務規則」は、戦場における測量の原則を定めており、そこで図根測量に規定される「迅速測法」は、使われる器具の指定から、あきらかに今日いわれるような平板測量となる(アジア歴史資料センター資料:C09050091500)。

ところでこれらの2万分の1図が作られた遼東半島については、あわせて「遼東半島五万分一圖」も作製された。今後さらに検討する必要があるが、この5万分の1図の刊期は1896年になっている場合が多く(「遼東半島蓋平附近陸図」、アジア歴史資料センター資料:C13010123600など)、2万分の1図の方が先に作られたことがわかる。2万分の1図の作製が優先され、その成果は限られた地域ではあるが、「遼東半島五万分一圖」に反映されているのが確認できる。

こうした2万分の1図と5万分の1図のための

測図がどのように行われたかについてはわかることが少ないが、初期は第一軍や第二軍に随行した陸地測量部の技術者たちの役割が大きく、1895年になると、新たに雇用された多数の測量要員を加えた大規模な「臨時測図部」が主体になった(小林 2011: 93-99)。

1936年11月に行われた、陸地測量部の古参の測量師の座談会(「外邦測量の沿革に関する座談会」アジア歴史資料センター資料:C04121449200)には、そのときの体験が示されている。朝鮮半島に上陸した第一軍に随行したのは「第一軍司令部測量班」で、出席者の中では豊田四郎・別府八百衛がこれに属していた。この測量班が第一軍とともに出発したのは1894年9月1日で、班の編成が遅く、慌ただしかったという。うち豊田は朝鮮到着後まず南下して日清戦争の緒戦が行われた成歓・牙山方面の測量を開始したが、「携帯路板」(携帯図板ともいう野外のスケッチで使う画板のような簡易測量具[小林 2017 参照])しかなく困ったという。ただし成歓での測量(後述)を終わり牙山にいくと、平壤に急ぐよう指示され、ここでは司令部の工兵部から平板測量用の器具を借りて2万分の1の縮尺の測図を行った。

他方別府は仁川上陸後平壤に向かいその北部で測量したが、やはり平板測量用の器具(「測板」)がなく困ったとしている。そのご清国国境の九連城で豊田と別府は落ち合い、第一軍の戦場を追うように、鳳凰城、さらに海城方面に進んだ。

第二軍に随行したのは服部直彦大尉にひきいられた21名で、ほとんどが測量手であった。1944年3月刊行の陸地測量部の内部雑誌『研究蒐録地圖』には、この一員の中島可友の日記をもとにした回想文(「測量隨録」)が「明治二十七八年戦役に於ける測量隊従軍日記」というタイトルで収録されている(小林解説 2011: 第15号, 60-63)。これから遼東半島東南岸の花園口に10月末に上陸してから、占領間もない金州城までの行程や、その後の清国軍との戦い、その間の測量作業について知ることができる。「蒟蒻版」により、できた地

図の印刷も行ったという。

また上述の「外邦測量の沿革に関する座談会」では、野坂喜代松と中柴〔金+榮〕三郎がとくに旅順口付近での測量について触れている。日清戦争でも旅順要塞の攻撃が行われたが、それは早く終了し、測量が行われた。日露戦争時に有名になる「二百三高地」について「一番始メニ二百三(メートル)トイフ標高ヲ取ツタノハ吾々ナンダ」(括弧内引用者)と回想されている。

他方「臨時測図部」が編成されて旅順に到着したのは1905年2月となる。これについては臨時測図部長の關定暉中佐に随行した小原乙次郎が「外邦測量の沿革に関する座談会」で回想している。關は遼東半島に下記のように展開した測量班を巡回して監督したようである。

1895年4月の報告に付された「金州半島測圖部署」(アジア歴史資料センター資料:C06061437600)から、今日遼東半島といわれる地域を金州半島と称しているが、臨時測図部の5つの班の班長とその分担地域がわかる。第1班(班長:依田正忠大尉)が北東部の「鳳凰」地域、第2班(班長:服部直彦大尉)が旅順・大連などを含む「金州」地域、第3班(班長:栗屋信雄大尉)が北部の「海城」地域、第4班(班長:菊地和太郎大尉)が中部の「大孤山」地域、さらに第5班(班長代理:久重祥蔵陸地測量師)が西部の「復州」地域をそれぞれ担当していた。したがって精度の問題は別にして、遼東半島のほぼ全域について基本的な地理資料が収集されることになったと考えられる。

次節では遼東半島について作製された2万分の1地形図の目録を示すが、その刊行機関については、陸地測量部とともに、ほとんどで第一軍司令部・第二軍司令部と記している。これに対して小山史料にみられる「遼東半島(嶋)五万分一圖」では、「臨時測図部」も登場してくる。この点を考えると、戦史用の2万分の1図は、臨時測図部が活動を開始する前に、第一軍と第二軍に配属されていた測量手たちによって作製されていたとみ

てよいであろう。

なおこうした第一軍・第二軍の測量班の測量技術者は、両軍とともに先に帰国した者と臨時測図部に合流してさらに測量を続けた者にわかれたが、後者の方が多かったようである。

「外邦測量の沿革に関する座談会」の発言のなかで、もう一つ留意されるのは、豊田四郎が2万分の1の縮尺での測量について、「内地ト同じ」と語っていることである。日本本土では、この頃正式二万分の一地形図が作られており、彼らの作業が慣れ親しんだ縮尺で行われたわけである。それはおそらく精度の高さにつながったと想像される。

すでに触れたように、日露戦争に際しては、これら2万分の1図がカバーする地域で再度戦闘が発生し、ふたたびその多くの地域で戦史用の2万分の1図が作製された。これらと比較対照することにより、わかることがいろいろあるが、それは今後の作業ということにしてつぎに進みたい。ただし日清戦争期と同じ場所について作製された2万分の1を対照してみると、刊期の記載様式にちがいがみとめられ、日露戦争期の図はその部分についても新しく印刷しなおされたことがあきらかであることを付記しておきたい。

2. 日清戦争期作製2万分の1図の目録

つぎにこれらの2万分の1図の目録を見ておきたい。遼東半島の大部分については、第一軍司令部と陸地測量部の刊行となっている。第一軍司令部測量班の測量手は全員で10名であったと考えられ(アジア歴史資料センター資料:C06061163300)、第二軍に随行した測量班の半分以下となるが、多くの地域を担当している。また上記のように初期は携帯図版を使っているが大部分は平板測量によるものであろう。

表1に示した九連城近傍圖の測図は1894年とされており、鴨緑江渡河作戦の成功(10月25日〔井ヶ田・山岡編2006a:141-146])以後急速に作製されたと考えられる。他方、表2~表5に示

した鳳凰城・太平山・蓋平・海城地域のものでは、測図時期が1895年となる。冬が到来して積雪などのため軍事行動が容易でなくなり、また清国軍の抵抗もあって、測量作業は1905年春に行われることになったと推定される。測量班の場合ではないが、歩兵第六連隊で海城を拠点に活動してい

た山岡金藏中尉の場合、3月末になって命令を受け海城西方の戦場（1904年12月18日）跡地の測量を実施している（井ヶ田・山岡編2006b: 97-98; 2007: 138）。

表1：九連城近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	刊行機関	備考
1	虎山	1894年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
2	義州	1894年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
3	大樓房	1894年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
4	九連城	1894年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
5	沙河鎮	1894年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96

注：大阪大学蔵、サイズは各59.0×64.0cm.

表2：鳳凰城近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	刊行機関	サイズ (cm)	備考
1	一面山	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	46.0×58.0	秘96、一覽図
2	藍旗山	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	46.4×59.0	秘96
3	砬子溝山	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	46.4×59.0	秘96
4	鳳凰城	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	49.1×63.8	秘96、鳳凰城 城壁断面図

注：大阪大学蔵

表3：大平山近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	刊行機関	備考
1	大石橋	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96、一覽図
2	薄洛舗	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
3	唐旗堡	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
4	大平山	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
5	藍旗廠	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
6	韓家學房	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
7	二道溝	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96
8	黄旗廠	1895年	1895年	第一軍司令部・陸地測量部	秘96

注：大阪大学蔵、サイズは各46.0×58.0cm.

表 4 : 蓋平近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	刊行機関	備考
1	蓋平	1895 年	1895 年	第一軍司令部・陸地測量部	秘 96、一覽図、蓋平城壁断面図
2	龍灣堡	1895 年	1895 年	第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
3	海山寨	1895 年	1895 年	第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
4	鳳凰山	1895 年	1895 年	第一軍司令部・陸地測量部	秘 96

注：大阪大学蔵、サイズは各 46.0×58.0cm.

表 5 : 海城近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	修正 (脩正)	刊行機関	備考
1	紅崖子		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96、一覽図
2	長岑子		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96
3	石頭山		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96
4	海城		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96、城壁・堡壘断面図
5	鐘家台	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
6	仙李村	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
7	大費屯		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96
8	唐王山		1895 年 5 月	1895 年 7 月	大本營製圖部・陸地測量部	秘 96
9	毛 [示+邑] 屯	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
10	牛莊城	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
11	岳家屯	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
12	感王寨	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
13	石橋子	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
14	頭台子	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96
15	沙河沿	1895 年	1895 年		第一軍司令部・陸地測量部	秘 96

注：大阪大学蔵、サイズは各 49.0×64.0cm.

表 6 : 旅順口近傍圖

番号	タイトル	測図	製版	刊行者	アジア歴史資料センター のリファレンス・コード
1	土城子	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146200
2	八里庄	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146300
3	旅順口	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146400
4	左家屯	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146500
5	水師營	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146600
6	椅子山	1895 年	1895 年 5 月	第二軍司令部・陸地測量部	C13010146700

注：防衛省防衛研究所蔵小山史料（ただしアジア歴史資料センターの公開画像による）

ところで表 2～表 5 には一覧図、またそのうち表 3 を除いて城壁断面図や堡壘断面図が示されている。一覧図は図幅間の接合関係を示し、断面図は攻撃や防御の際の重要情報として記載されたものであろう。図 1 は鳳凰城近傍圖の一覧図である。図幅の番号は、北東隅を 1 号、その南を 2 号とし、西側の列に移る。この原則は表 1～表 6 まで同様である。なおこの右上には、鳳凰城近傍圖 1 号の「一面山」図幅みられる「秘」と番号「96」を示している。後者は朱で後からゴム印で押されたものと思われ、表 1～表 5 の全部の図幅に見られるが、残念ながらその果たす役割はわかっていない。

図 2 はやはり鳳凰城近傍圖にみられる鳳凰城の城壁断面である。材質までは調べていないが、サイズは詳しく採寸している。左上にみえるのは、測図と製版の時期の記載および図幅の位置関係を示す図でいずれも簡略である。

以下図 3 は大平山近傍圖の一覧図で、左下には日露戦争の戦場として知られるようになる大石橋の集落がみえる。図 4 は蓋平近傍圖の一覧図で戦場付近だけを図化している。図 5 の海城近傍圖は、これに対して広範囲におよぶが、上記の山岡金藏らの測量した範囲もカバーしている(8.感王寨付近)。

なお、表 5 の刊行機関の欄には、第一軍司令部にかわって、「大本營製圖部」となっている場合がある。これは、日清戦争に際して設置された大本營でもおもに印刷業務を担当した部署のようで、アジア歴史資料センター資料 (C06061254500) によれば、1894 年 10 月 13 日以後印刷を、さらに同 11 月になると製図も行うようになったという。アジア歴史資料センターが公開している地図や戦闘詳報には、この部署が印刷したことがわかるものがみられる。

その「主任」は陸地測量手の齊藤敬義で、日清戦争末期に大本營から征清大總督府が旅順に派遣されるときには、随員することとして増員と設備の充実を要求している(アジア歴史資料センタ

一資料、C06061321000)。国立国会図書館デジタルコレクションが画像を公開している 1905 年 3 月 28 日製圖部印刷の「大總督府人名表」の備考には、陸地測量手として齊藤のほか山際市松、福島市太郎の氏名が記されており、彼らが中心になって業務を行ったと考えられる。

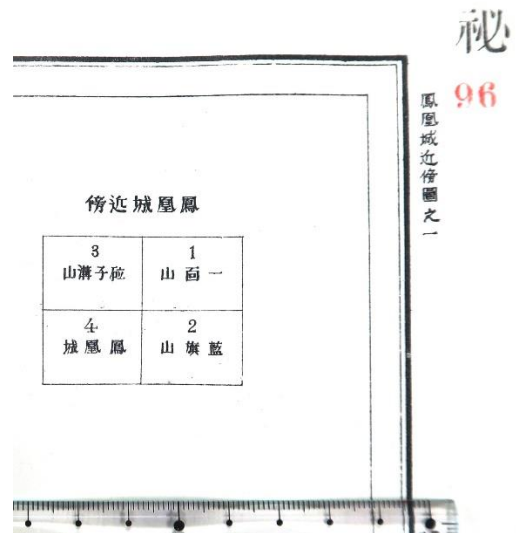


図 1：鳳凰城近傍圖一覧図

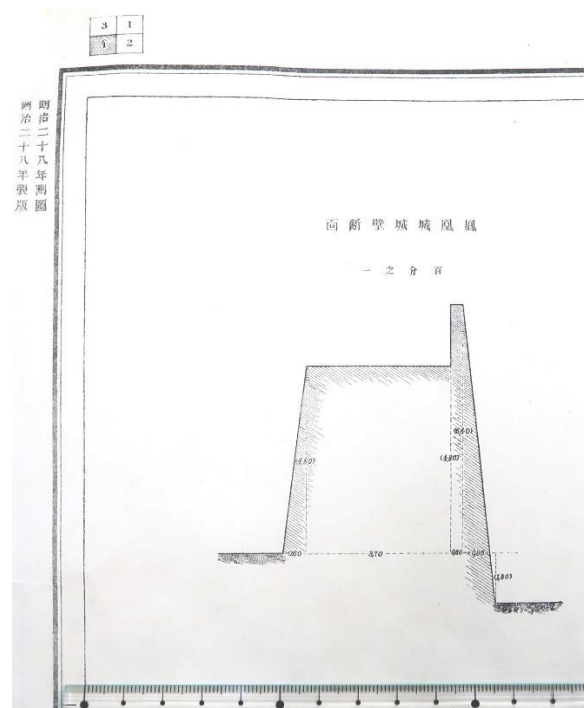


図 2：鳳凰城城壁断面圖

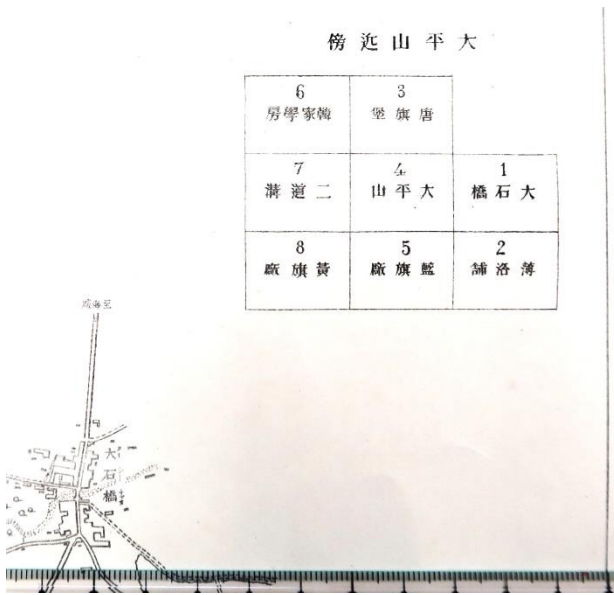


図3：大平山近傍圖一覽図

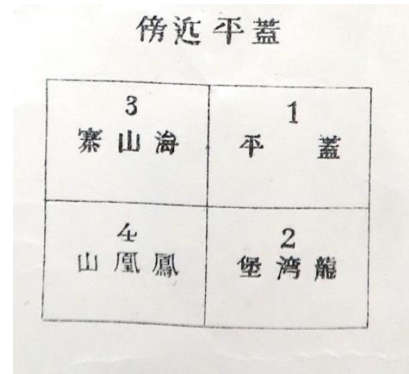


図4：蓋平近傍圖一覽図

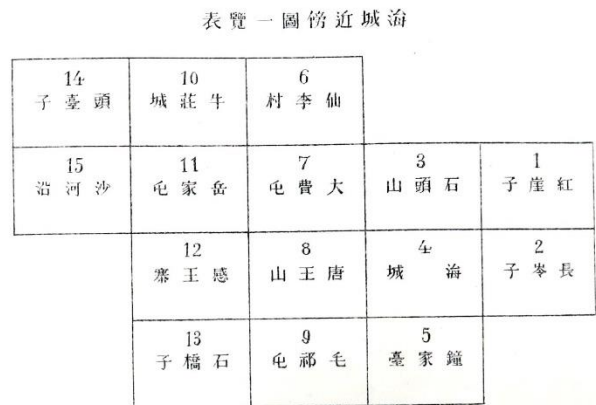


図5：海城近傍圖一覽図

表7：『明治廿七八年日清戦史』の附図とそのベースマップとなった日清戦争期の2万分の1図

附図番号	附図のタイトル	縮尺	戦闘時期	ベースマップとなった図群
12	虎山附近戦闘圖	1/2万	明治27年10月25日	九連城近傍圖
13	鳳凰城之防戦圖	1/2万	明治27年12月13・14日	鳳凰城近傍圖
15	旅順口戦闘圖	1/2万	明治27年11月21日	旅順口近傍圖(アジア歴史資料センター公開図)
17	蓋平戦闘圖	1/2万	明治28年1月10日	蓋平近傍圖
18	海城防戦圖(第一回)	1/2万	明治28年1月17日午後3時頃	海城近傍圖
19	海城出撃之圖	1/2万	明治28年2月28日	
20	大平山付近戦闘圖	1/2万	明治28年2月24日	大平山近傍圖
23	威海衛軍港南岸之戦闘圖	1/2万	明治28年1月30日	(未見)威海衛近傍圖

注：參謀本部編(1907)所収の図による。

3. 『明治廿七八年日清戦史』の附図との関係

以上のような日清戦争期の2万分の1地形図は、公式戦史である『明治廿七八年日清戦史』の

附図のベースマップとして利用された。両者の関係を示したのが表7である。

『明治廿七八年日清戦史』の附図にみえるもの

と 2 万分の 1 地形図を対照してみると、海城近傍図の場合を除き、地形図の図示範囲が、当該の戦闘の状況を示すために設定されたと考えられる場合が多い。現場での測図に際して、はじめから『明治廿七八年日清戦史』の附図のベースマップになることを予想して作業したと考えられるわけである。

なお表 7 では、山東半島の威海衛の戦闘図も示している。この図のベースマップになったと考えられる「威海衛近傍圖」の名称は、軍事用地図の解秘や廃版に関するリスト（アジア歴史資料センター資料：C06084248100）のほか、上述の 1940 年 3 月発行の「外邦局地圖一覽圖（其一）」にもみえている。後者からはこの図群が 20 図幅で構成されていることがわかるが、附図 23 の「威海衛軍港南岸之戦闘圖」に利用されたのは北部の図だけであつたと考えられる。なおこの図群のための測図の状況（ただし 1897 年）については、『外邦測量沿革史草稿』（初編後編）がくわしい（小林解説 2008: 82-85）。

ところで『明治廿七八年日清戦史』の附図には、ほかにも縮尺 2 万分の 1 の図がみられる。その一方は附図 3「成歡附近戦闘圖」で、日清戦争の緒戦の戦場を示している（参謀本部編 1904: 卷末）。

成歡附近については、ほかに 5 万分の 1 図「成歡驛」があり（大阪大学蔵）、この測図は 1904 年、製版は 1905 年 8 月となっている。また刊行機関は第一軍司令部と陸地測量部である。両者は同じ地域を描いているが、縮尺を別にしても大きな差があり、5 万分の 1 図は図示する範囲が狭く、成歡驛を除く地名も一致しないものが多い（本号表紙に掲載の同図ならびに解説を参照）。この地域の戦史用の測図は、上記のように、まず 1894 年 9 月はじめに第一軍の測量班が担当したが、「携帯路板」（携帯図板）で慣れない作業を行った。また日本兵たちはすでにこの地域におらず、苦労が多かつたとされる（上記「外邦測量の沿革に関する座談会」の豊田四郎の発言、小林 2011: 94 も参照）。

これに対して附図 3 の「成歡附近戦闘圖」のベースマップの測図は、1897 年 5～8 月に陸地測量手、青山良敬の指揮のもとに雇員の由比勇造らによって行われたもので、『外邦測量沿革史草稿』（初編前編）からよく経過がよくわかる。また住民は地名を言わないので、郡役所を通じて住民に指示を出して地名を確認している。それに際し、先行して作られた 5 万分の 1「成歡驛」図幅を持参し、地名を確認して訂正したのも注目される（小林解説 2008: 55-59）。

以上から、5 万分の 1 図「成歡驛」と 2 万分の 1 の附図 3「成歡附近戦闘圖」の差の背景が理解されるが、ただし前者が携帯図板で作られたことを考慮すると、筆者はその種の用具でこれだけの図ができることに驚きを感じる。陸地測量手の技量の高さがうかがわれる。

さらに平壤付近に関する附図 7「平壤戦闘圖」（其一、明治 27 年 9 月 15 日午前七時頃）、附図 8「同」（其二、明治 27 年 9 月 15 日午後 2 時 30 分ころ）、附図 9「同」（其三、明治 27 年 9 月 15 日午後 9 時頃）のベースマップは、これに対して、成歡方面の測図を終わって、上記のように第一軍を追って北上した陸地測量部の技術者が測量したものと考えられる。縮尺を 2 万分の 1 としたのは、当初よりこの縮尺で戦史用の地図の作製を予定していたことをうかがわせる。

もうひとつの縮尺 2 万分の 1 図が、附図 21「田庄臺戦闘圖」（明治 28 年 3 月 9 日）である。このベースマップについては、残念ながら情報を得ていない。日清戦争の末期の戦場となるが、2 万分の 1 図が刊行されなかった可能性もある。あるいは山岡金藏の行ったような戦場の測図の成果を流用した可能性がある。

4. 旅順口近傍圖について

以上のように日清戦争期に作製された 2 万分の 1 地形図は、まず『明治廿七八年日清戦史』の附図のベースマップとして利用されたが、それ以外の用途でも参照されることがあつたことに触れ

ておきたい。長南 (2015: 457-463) は、日露戦争における第三軍による旅順包囲戦が長引いた原因の一つとして、参謀本部が提供した地図が不備であったことをあげて、同軍参謀の井上幾太郎 (1872-1965年[白石 2012]) の見解にくわえて、参謀次長であった長岡外史 (1858-1933年 [中山 2012]) の回想を紹介している。井上はその図におけるロシアの構築した防御線の記載が不十分とし、長岡は参謀本部第五部の鑄方徳蔵 (1864-1933 [原 2012]) に旅順の地図を見たいと注文したところ日清戦争中に作られた「十年前の古地図」をもって来たという。ロシアの警戒が強く、それが強化した旅順要塞の詳細がわからなかったという背景も明らかである。

この「十年前の古地図」が、すでに言及した「旅順口近傍圖」であることに疑問の余地はない。と同時に、それが「古地図」と表現されるのは、それに新しい情報を付け加えて提供するのが本来の参謀本部の役割と考えられていたことがうかがわれて興味ぶかい。

ただしこの2万分の1図は、すでに見てきたように、日清戦争にともなって日本軍が作製した地図のなかでは大縮尺で、精度が高く、日清戦争に際して清国が構築した防御施設をよく表現していると考えられる。すでに触れたように、203高地の標高を最初に記載した地図でもある。

このような「旅順口近傍圖」が旅順包囲戦のなかでどのように使用されたかは興味深い問題で、一部の戦闘詳報に付された図では、あきらかにこれがベースマップとなっているように思われる (たとえばアジア歴史資料センター資料: C13110503200)。旅順包囲戦の立案段階では「古地図」といわれたものでも、こうしたレベルで「旅順口近傍圖」が使用されたことに留意すべきであろう。これらの地図には、ロシア軍側の防御施設が詳細に描きこまれており、そのベースマップの役割を「旅順口近傍圖」が果たしたことになるわけである。長岡外史のいうような「古地図」とは言いがたい意義を持ったことになる。

このように検討してみると、この時期の日本陸軍の高級将校がもっていた地図観の特色がうかがわれる。そこでは、なによりも作戦立案の立場から地図が評価され、ベースマップとしての質は重視されなかったということになる。これに対して現場の将校がこの2万分の地形図をどう評価したかという点については、今後の課題としたい。

付記 本研究にはJSPS科学研究費、課題番号: 20H01385を使用した。記して感謝したい。

文献

- 井ヶ田良治・山岡高志編 2006a. 『『征清戦袍餘滴』(二): 山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌』社会科学 (同志社大学人文科学研究所) 76: 139-164.
- 井ヶ田良治・山岡高志編 2006b. 『『征清戦袍餘滴』(三): 山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌』社会科学 (同志社大学人文科学研究所) 77: 91-119.
- 井ヶ田良治・山岡高志編 2007. 『『征清戦袍餘滴』(五): 山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌』社会科学 (同志社大学人文科学研究所) 79: 123-141.
- 小林茂 2011. 『外邦図: 帝国日本のアジア地図』中央公論社 (中公新書 2119) .
- 小林茂 2017. 「路上測図」小林茂編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会, 114-116.
- 小林茂解説 2008. 『外邦測量沿革史草稿、第1冊』不二出版.
- 小林茂解説 2011. 『研究集録地図、第3冊』不二出版.
- 小林茂・小嶋梓・多田隈健一・顧立舒 (2012.3) 「日清・日露戦争時に臨時測図部が中国大陸で作製した地形図 (大阪大学蔵)」外邦図研究ニューズレター9、59-65頁。
- 小林茂・小林基 (2013.8) 「北清事変に際して作製された2万分の1「山海関」地形図 (大阪大学蔵) 一解説と目録一」外邦図研究ニューズレター10、53-59頁。
- 小林茂・長谷川敏文・波江彰彦 (2010.3) 「高木菊

三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(下)」外邦図研究ニューズレター 7、53-61 頁。

参謀本部編 1904. 『明治廿七八年日清戦史、第一卷』参謀本部.

参謀本部編 1907. 『明治廿七八年日清戦史、附圖』参謀本部

白石博司 2012. 「井上幾太郎」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研, 110.

瀧原三郎 1928. 「地圖の利用と日露戦争に於て我が軍の利用せし地圖」偕行社記事 641: 77-106.

長南政義 2015. 『新史料による日露戦争陸戦史』並木書房.

中山隆志 2012. 「長岡外史」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研, 140.

原剛 2012. 「鑄方徳蔵」歴史群像編集部編『日露戦争兵器・人物事典』学研, 106-107.